

九頭竜川流域委員会における論点整理（発言要旨集）第10回

発言状況等	内容区分			分野	発言要旨	主意	I D
	質問	課題	提案				
第10回流域委員会				治水（河川整備）	過去の経緯で大体50年ぐらいを対象にして論じてきたものを、ここに来て、殊さら20年で被害が出るということ強調されるのは問題。50年でいくと、確かに日野川は少し被害は少ないが、足羽川も九頭竜川も同じようなものだとということで、同じように考えていかないといけない。	九頭竜川、足羽川での50年確率の洪水では、氾濫によって想定される被害額は同程度であり、両河川とも同じ治水安全度で考えていくべき。	1001
第10回流域委員会				治水（河川整備）	スライドの14によれば足羽川の幸橋より下流5kmぐらいの流下能力が不足しているという。片や浸水マップが23にあるが、この破堤箇所は足羽川の幸橋から水越橋のあたりと一致しているのか。また、この流下能力が低いのは、浅いのか、あるいは掘削で対処できるものなのか。	浸水マップ（スライド23）の破堤箇所は、足羽川で流下能力が不足する幸橋から水越橋のあたりと一致しているか？また、足羽川の改修は、現在どのような状況にあるのか？これまで実施してきた河川改修による治水上の効果を検証するべき。	1002
第10回流域委員会				治水（河川整備）	我々はこの40年の間に洪水が起こってくるたびに対策を立ててきた。これからいろいろなものを考えていく上で、その工事の結果が治水上にどれくらい効果をもたらしているのか、どれくらいそれに使われたお金があるかを知りたい。	これまで実施してきた河川改修による治水上の効果を検証するべき。	1003
第10回流域委員会				治水（河川整備）	治水の問題をこれから考えていくときに、現実と置かれている立場を理解しながら、社会常識の上で治水計画を立てていくべき。昔から言われてきた雨の確率だけで物を考えていくのに少し無理があるのではないのか。	治水による効果を検証するにあたっては、社会資本基盤の整備がなされてきたことを考慮することが必要。	1004
第10回流域委員会				治水（河川整備）	土木の方が常識で持っていることと市民が常識で持っていることとの差が非常に大きくなってきて、問題が起きている。どちらも常識というところに歩み寄ってこない議論ができない。確率論というのは非常にわかりやすいが、治水というはゆるゆるの行政。もう少し説明するとき市民の立場になって、何が困る、雨が降って浸かったらどういふ部分が困るということ考えながら、そして、どれくらい広さのところ何が起こるのかという現実の問題と、もう一つは、それよりも将来の20年、30年にどうあつたらいいのかという問題を両方から攻めるべき。	土木技術者（河川管理者）と住民との治水事業に対する意識の差を縮めていくことが重要。	1005
第10回流域委員会				治水（河川整備）	実績の雨は大事にすべき。確率というのはあくまでも補足的な資料であって、過去に降った雨が今降るとどうなるか起こるのかというのをもう少しきちり検証しないとけないのではないのか。	実績の降雨特性を踏まえて治水安全度を設定していくことが重要。“過去の洪水が、今起きたらどのようなことが起こるのか”ということを検証すべき。	1006
第10回流域委員会				治水（河川整備）	氾濫解析のときに、足羽川で51年9月と28年9月の雨を使っているが、なぜこの雨を取り上げられたのか。その辺を少し補足説明し、例えば、足羽川の雨の特性をどう考えているかということとを解説すると非常に理解が進むのではないのか。	足羽川の氾濫解析で、昭和51年9月、昭和28年9月の雨を使った理由について補足説明がほしい。	1007
第10回流域委員会				治水（河川整備）	安全度の問題で、結局日野川、九頭竜川においては30に近い数字があつて、足羽川においては10しかない。それは結局、市街化区域が多いためにやはり手がつけられなかったということが考えられる。幸橋でもかけ替えをやっているが、掘削するにも限度があつて、現在1,200m ³ /s流下しているが、掘削しても1,800しかできない。それ以上の洪水があつた場合においては何らかの方策をしなければならぬ。	足羽川の治水安全度が1/10程度であるのは、市街地を流れているため河川改修ができなかったためである。将来、掘削により1,800m ³ /sを確保できても、それ以上の洪水に対する対策を講じるべき。	1008
第10回流域委員会				流域委員会での検討スタンス	安全度の方で話をすると、九頭竜川が30になっている。それはダムありきで、既成事実としてダムがあるということ30になっているのか。それを一律に50まで上げようとしたときに、九頭竜川ではどの程度の工費がかかるのか。足羽川を50まで上げようとした場合において、もし幅幅する場合にはこれだけの経費がかかる。また、掘削する場合は、海水がどんどん入ってきて、どこまで掘削が掘削できない。そういうことを勉強会で具体的に話をし、我々が納得して、一般市民に対しても話せるようにできればと思	治水事業の費用対効果等に関する勉強会を開催していくべき。	1009
第10回流域委員会				治水（河川整備）	足羽川の整備という、普通は引堤とダムのセットで整備をすれば一気に問題は解決すると思うが、今ダムの問題をどうするかということこの場でも議論しないとけないということ、細かな何年確率とか、降雨パターンによって流出してくる水の流量がどういふパターンになるかという、非常にシャープな話になっている。本来、ダムもセットという形で議論になれば、過去の九頭竜川ダムや真名川ダムの実績等を踏まえて、もう少し議論できると思う。	ダムが建設された場合、降雨分布と流出流量の関係を知ることが重要。	1010
第10回流域委員会				治水（河川整備）	費用の情報が先に与えられれば安全度の目標が決まるのではないのか。1年安全度を伸ばすことに定額では被害額が増えている。ということは、1年安全度を伸ばすことによって得られる便益がほぼ一定ではないかということが読み取れる。その安全度を1年伸ばすためにかかる費用がもしわかれば、そして、それがあつた時点から物すごく費用が上がるということがわかれば、そこから先は考えなくていいという形で意思決定ができる。	整備に係わる費用を示すことで整備可能な目標（安全度）が絞られる。	1011
第10回流域委員会				治水（河川整備）	河道の改修をして、それがどれくらい時間と費用がかかるのかということも大事だが、それ以上に、そのことによってどう環境に影響が与えられるかということも大事なことである。代替案を出すときには、そういうことも配慮した範囲をきっちり作るべき。できるだけその数字の上に乗って議論できるようにしていけば、行き違いない。行き違いないそれぞれが考えていることのベースが違って議論するところにあるように思うので、同じベースでやっていくことを心がけてほしい。	整備に必要な費用、時間の他に、環境への影響についても配慮することが重要。環境への影響を議論するには、配慮した範囲と具体的な数値を提示すべき。	1012
第10回流域委員会				治水（河川整備）	追加資料で、説明が難しいと言われた7、8の図などは非常に有効な図だと思う。これで、この川については、これが一番危険だから、この年の雨を使いましょうということとをまず決めて、その次のステップとして、今度はそれを使ったシミュレーションで、18番の三川の被害額の図で確率年を決めるという手順は必要だと思う。	三川ごとに対象降雨を選定し、それぞれの被害額を勘案して確率年を決定すべき。	1013
第10回流域委員会				治水（河川整備）	なぜ150年ではだめなのか、予想もしない膨大な金がかかるのかどうなのかということ、素人的によくわからない。やはり150年ぐらいで完全に、子供たちに残せるものは残したいという目標設定、それは途方もない意見なのかどうなのかがちょっとわからない。150年ぐらいだったらコストがどのくらいかかるのか。単純に土木的なコストだけではなく、環境負荷の問題を考えたら、コスト計算は訳がわからなくなるのかもしれないと思うが、150年、絶対だめだというのはやはり無理	安全度を1/150にするという考え方があつてもいいと思う。	1014
第10回流域委員会				治水（河川整備）	20～30年の間に、少なくとも到達可能な整備ができるような内容をまず立てて、コストや時間はもう20～30年という中で描く。150分の1とか200分の1というのをこの流域でセットすることは、考える素材としてはありえるかもしれないが、現状の安全水準からステップアップするというものが少なくともここ20～30年を考えたときには必要であり、まずやるべき、到達すべきものである。まず30から50という範囲に照準を当てて、どういふ代案等で対応できるか、そういうことを考えていくべき。	20～30年の間に、少なくとも到達可能な整備内容を立てることが重要。	1015
第10回流域委員会				治水（河川整備）	国土交通省あるいは県の河川課を中心に話し合われているが、やはり地球温暖化の問題と合わせて考えないと問題の解決にはならない。川の問題はワンノブゼムだと。ほかの河川計画の委員会でも20年、30年という短いタームでの話であり、恐らく来月の世界水のサミットも、そういう問題も踏まえてやるだろうと思う。やはりこの辺を踏まえていくと、当面は20～30年でも、川上先生がおっしゃった100年、150年タームでいろいろ安全度を考えるべき。	河川における目標設定については、地球温暖化の問題と合わせて考えることが必要。当面は20～30年の安全度の確保が必要であつても、100年、150年ターム（時間）でいろいろ安全度を考えるべき。	1016
第10回流域委員会				治水（河川整備）	ダムをつくる場合においては150年とか200年の確率ですべき。これは表日本において、豊川の場合でも流域委員会では200年確率でもってやっている。それはダムにだけあつて、下流に対しては、九頭竜川が30になっているということは、ダムありきでもって、足羽川にダムをつくる場合においては、下流は50なら50で、全河川をある程度統一して直していく、改修していくのが妥当ではないか。	他ダムの事例からもダムをつくる場合においては、150年・200年の確率で考えることが必要。ただしその下流河川については、50程度で全河川の安全度をある程度統一して改修していくべき。	1017
第10回流域委員会				治水（河川整備）	治水の当面の整備スタンスとしては20～30年から50年ぐらいの幅でもって目標にする。どういふ代案でそれに対応できるか、それに伴う費用とか時間といったものを提示し、もっとレベルを上げなければいけないとか、30分の1ぐらいでとか、市民も当然負担等もあり得る話として描くような形の内容、そういう形で少しまとめ、次回なり、次々回に、そういうものを受けた代案、費用とか時間といったものもあわせて提示し審議、議論する。	治水の当面の整備スタンスとしては、20～30年から50年ぐらいの幅で目標を定める。その上で費用・時間を考慮して、具体的な目標を設定すべき。	1018
第10回流域委員会				環境・利水（親水・利用）	上流の私たちが川に親しむ、川をいとしむ気持ちを持つ必要があるのではないかと思います。昔、川というのは生活の大きな場として、勝山の場合には縦横に川が流れておりますが、生活の場として物を洗ったり、物を捨てる場所でもあつたわけです。今みたいに環境がよくなってしまつたものですから。今も年寄りの人たちは、大分よくなりましたが、川へ物を捨ててもいいという気持ちがまだ少し残つております。それで、結局増水などした場合にはたくさんのごみがたまっていて、それが海の方へ流れていってしまう。ですから、環境の中に川をいとしむ、親水の気持ちをお互いに住民の意識として持つ、そういうことがこれから大事になってくるのではないかと考えています。	「川をいとしむ」「親水の気持ち」を共有することを課題として付記すべき。	1019
第10回流域委員会				環境・利水（親水・利用）	川と人、川と地域との係わりを深めていくことが非常に重要。そのために各流域住民の年長者からの記憶の収集を行って、整理して公開していく方法を検討すべき。年長者の記憶の中にはその土地の貴重な歴史とか民俗、遺産が存在している。そういう証人たちの記憶を早急に収集するべき。	川と人、川と地域との係わりを深めていくことが重要。各流域住民の年長者からの記憶の収集を行い、整理して公開していく方法を検討すべき。	1020
第10回流域委員会				環境・利水（親水・利用）	歴史・文化の発掘に努めるということで挙げられているのは、石碑とかプラスのものばかりだが、九頭竜川の支川の平泉寺からの女神川の大洪水の歴史（天保11年）、そのときに川上から大きな石が河口近くまで流れてきた。古文書には数字も出ているが（周14間、高さ1丈4尺の巨岩）、それが草やぶの土の中に埋もれていっている。そういう負の遺産、そういう歴史にも目をつけていくようなものであればよい。	「歴史・文化の発掘に努める」といふ方向性の中で、女神川の大洪水の歴史など、災害の歴史についても視点を向けていくことが必要。	1021
第10回流域委員会				環境・利水（親水・利用）	九頭竜川なくしては勝山、上志比村の歴史はなかつたのではないのか。歴史を学ぶと一緒に、大変歴史のある九頭竜川をみんなして大事にしていこうという気持ちを育てていく一つの証になるのではないのか。	歴史を学ぶとともに、歴史性の深い九頭竜川を大事にしていこうという気持ちを育てていくことが重要。	1022
第10回流域委員会				流域委員会での検討スタンス	産業構造に河川が非常に痛めつけられてきているということ。農業の基盤整備のあり方をどうするかという議論もこの場でしていかないとけないのではないのか。	産業構造に河川が非常に痛めつけられてきているということと主張したい。農業の基盤整備のあり方をどうするかということも流域委員会で議論すべき。	1023